



真の国際化とは自分の国を知ること。
近頃、女性の浴衣姿をよく目にするようになった。
男性も、好みの浴衣を身に着けて日本の心を感じてほしい。

text by 渡辺幸裕 + photographs by 稲垣純也、乾 芳江

花火見物に若い女性の浴衣姿が似合う夏、百貨店はもちろん量販店や通販でも女性用浴衣が花盛りである。ところが、男物となるとその品揃えは寂しい限り。女性だけでなく男性も、気に入った浴衣で格好よく夏を過ごしてもらいたい。大人の男が浴衣を粋に着こなすポイントを、銀座もとじの泉二弘明さんに伺った。

「着る時に大事なのは女性のような抜き襟をしないこと。帯は前下がり後ろ上がりにすること。そして猫背で歩かないことです」
男性用の浴衣は、女性用のものと違って、身丈(仕立てられた丈)が着丈(着た時の丈)になる。サイズが大きすぎるとだらしなく見え、逆に小さいと子供っぽく見えてしまうので、体に合わせて仕立てるのが大前提だ。

浴衣はそもそも、平安時代には「湯帷子」と呼ばれ、貴族が蒸し風呂に入る時に身に着けたものだった。銭湯が普及してからは庶民も湯上がりに着用するようになり広まった。しかし今では浴衣も立派な外出アイテム。花火見物だけでなく、通気性が良い

ので夏の夕涼みには最適だ。居酒屋、そば屋、ワインバーに行くのもおしゃれである。ただし、汗で浴衣がべたつくと思苦しくなるので、肌褌袴もしくはUネックシャツ、そしてステテコは着用した方がよい。

浴衣は着物よりも手頃な値段なので、うっかり汚しても気軽に洗濯ができる。初心者が着物を着こなすためのトレーニングには最適だ。帯の締め方が難しいという人にはマジックテープで簡単に着脱できる「ワントッチ帯」をお薦めする。

浴衣に欠かせないもう一つのアイテム、下駄においても、気をつけてほしいことがある。浴衣の場合は着物と違って素足に履くので、鼻緒でマメがきやすい。ここぞという時にマメが痛くて情けない歩き方にならないよう、事前に履き慣らしておいた方がよいだろう。

休日、温泉に行く時などに「マイ浴衣」を持って出かけた。お気に入りの浴衣で過ごす温泉宿で、おいしい料理とお酒を味わいながら過ごすひときは、上質な夏の思い出となるだろう。





貝の口

最も一般的な結び方。形が貝の口に似ていることからついた呼び名である。江戸時代、商人や町人が好んで使っていた。現在では女性でもこの結び方を使うことがある。結び目の先に出ている部分の、「て(2つ折りになっている細い方)」と「たれ(太い方)」の長さが、2:1になるように結ぶときれいに見える。

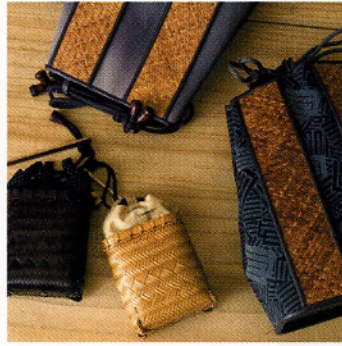


帯の詳しい結び方はこちら

http://www.motoji.co.jp/knowledge/Kitsuke_men_Obi.htm

浴衣の着方はこちら

http://www.motoji.co.jp/knowledge/Kitsuke_men_Yukata.htm



小物入れ

気に入りの浴衣にきりりと帯を締めたいが、気がつくとお財布や携帯電話などの小物をしまう場所がない。浴衣に限らず和装の場合、意外と難しいのが小物をしまうバッグの問題だ。浴衣に紳士用セカンドバッグというのはいかにもミスマッチ。やはり和装用の小物入れを使いたい。竹を編んだものや麻製の和装バッグは見た目も涼しげで、浴衣によく合う。



団扇

貴人が顔を隠すために使った翳(さしぼ)という道具が団扇の原型。あおいで風を起こす道具として団扇が庶民の間に普及したのは江戸時代だ。浮世絵を刷った美しい団扇が作られるようになったことで、単に涼を取るだけでなく、服飾の一部として楽しむという使い方が加わった。浴衣を着た時には、企業やお店が配る販促品ではなく、竹製の骨でできた“本物”を使いたい。浴衣の色や柄に合わせてコーディネートを楽しもう。



手ぬぐい

手ぬぐいも綿栽培が盛んになった江戸期に広く普及した。歌舞伎の世界や商家で宣伝の道具として使われることで、ファッション性を高めていった。吸水性に優れ、乾きやすい綿の手ぬぐいは汗拭きや手拭きに最適。懐に忍ばせた手ぬぐいをさっと取り出して使う姿は何とも粋だ。「ハンカチ王子」ならぬ「手ぬぐい王子」と呼ばれるかも。



下駄

普段から下駄を履いているという人はほとんどいないだろう。浴衣の時は素足に下駄を履くので、「緒ずれ」になりやすい。本番前に履き慣らしをしておこう。サイズも大事。かかとの部分が2~3cmほど台からはみ出しているのが粋な履き方だ。大きすぎる下駄は野暮になるのでご注意ください。



Yukihiko Watanabe

ビジネス・コーディネーター。1950年生まれ。前職のサントリー宣伝部で、海外イベントを担当した時、自国文化についての知識のなさを痛感。2001年独立を機に日本文化超初心者会の会“和・倶楽部”を提唱、運営中。会のコンセプトは「日本人に生まれたことを喜ぶたい」。

写真：新聞雑誌

銀座もとじ 男のきもの
Ginza Motoji Otoko no Kimono



住所：東京都中央区銀座3-8-15
電話：03-5524-7472
<http://www.motoji.co.jp/>



泉二弘明さん
銀座もとじ社長

■日本かぶれの会【風呂敷に親しむ会】のご案内■

第二部・第六回「包む文化、風呂敷」でお話を伺った山田悦子さんを講師に招き、風呂敷の歴史や包み方について学ぶイベントを予定しております。これを機に風呂敷をもっと身近なアイテムにして、プライベートはもちろんビジネスでも生かしてみたいかたがぜひご参加ください。詳細は日経ビジネスアソシエオンライン(<http://nba.nikkeibp.co.jp/>)でご確認ください。